

塩魚の焼くるにほひ：詩

著者	中村，信一
雑誌名	龍南
巻	2 2 5
ページ	1 3 - 1 4
発行年	1933-07-02
その他の言語のタイトル	塩魚の焼けるにおい：詩
URL	http://hdl.handle.net/2298/7127

鹽魚の焼くるにほひ

文三 甲三 中 村 信 一

わらび、しひたけ、ふき、つは、いたどり

豊かな味ひと匂ひとで、山から都へ春を運ぶ

一日一よそほひを改め

鋭い足音をたててよろめく、都

山間の村にはおだやかに、太陽が出てきて沈んでゆく

汗、疲、勞、苦、臭、わらびしひたけ

夕方

のきひくく煙がでる

僕は胸がむかつく

貯への鹽魚、月に一度、二度の行商人の籠からの珍客のためのそなへ

ぢぢぢぢ、

子供はにほひをかくのを喜び騒ぎ、今夜は家が明るい。客に氣兼ねして、それを制する母
夕闇に、犬はくんくんとうろつきまわる

暮れてゆく空に煙と匂ひと、僕は味噌汁を思ふ

わらび、しひたけ、いたどり、が。えん先の山に

久しぶりの客への心づくし

素朴な御馳走、純真な禮儀

僕は憂うつになる

彼等の親も、その親も禮儀として固守した

山の香がみち／＼てゐるのに

まだ魚がやけて居る